

# 学位請求論文審査報告書

氏 名：寺井 良宣

報告番号：乙第 69 号

学位の種類：博士（文学）

論文題目：天台円頓戒思想の成立と展開

## I、前言

寺井 良宣氏は昭和 24 年 2 月 26 日生の 63 歳で、昭和 63 年 3 月 31 日に龍谷大学大学院文学研究科博士課程仏教学専攻を単位取得し満期退学している。その後、平成元年を皮切りに本学非常勤講師を勤め、その後平成 12 年 4 月から同 15 年 3 月までは本学文学部の特別任用教授の職にあった。論文数は 55 点、辞書・解題の共著を含む著書は 5 点に及んでいる。

その寺井氏が学位請求論文として「天台円頓戒思想の成立と展開」（A 4 判 643 頁）を主論文として提出、それ以外に翻刻資料として「興円『円頓菩薩戒十重四十八行儀鈔』の翻刻と和訳」（同 91 頁）を付加している。以下にその要旨を述べ、その後に本審査委員会の総合評価を加える事にしたい。

## II、目次と論文要旨

### 目 次

- 第一部 中世期の天台比叡山における  
戒律復興と重授戒灌頂の思想
- 第一章 総 説
  - 一 比叡山黒谷における戒律復興とその意義
  - 一 中世期比叡山の戒律復興と研究の意義
  - 二 黒谷戒系とその文献
  - 三 興円と恵鎮らによる戒法復興の事蹟
  - 四 「重授戒灌頂」の創始と「授戒即身成仏」の考え方
- 第二章 求道房恵尋の先駆的役割と「円頓戒」思想
  - 第一節 求道房恵尋の「一心妙戒」の思想
    - 一 黒谷流における恵尋の位置
    - 二 恵尋の戒律復興をめぐる事蹟
    - 三 恵尋の著作
    - 四 「一心妙戒」の考え方
    - 五 一心戒思想の背景と課題
  - 第二節 恵尋の『円頓戒聞書』にみる思想的特質
    - 一 円頓戒法の「正依法華」義
    - 二 戒法の「即身成仏」義
    - 三 「一得永不失」の戒法

四 恵尋にみる浄戒双修

五 恵尋の發揮した思想特質

### 第三章 叡山黒谷流興円の戒法復興事業と思想の確立

第一節 興円の『一向大乘寺興隆篇目集』にみる

戒法の復興と修行の確立

一 興円の円戒復興事業と

『一向大乘寺興隆篇目集』の作成

二 『一向大乘寺興隆目集』の構成

三 末法の時機観と頓円の三学

四 円戒復興の僧制—大乘戒篇目—

五 行学二道—毎日毎月毎年—の行法—

六 興円らの修行と本覚思想の問題

第二節 中古天台期の比叡山黒谷における籠山修行

一 叡山黒谷における籠山行の復活

二 籠山中の修行法とその日課

三 食堂での坐禅（止観）と引粥作法

四 上厠と後架における作法

五 籠山修行と即身成仏義

第三節 伝信和尚興円（戒家）の円戒思想

一 『菩薩戒義記知見別紙抄』を中心として—

一 叡山黒谷流円戒のなかの興円の位置

二 興円の伝記と著作

三 『菩薩戒義記知見別紙抄』の構成とその性格

四 祖師上人（恵尋）にもとづく円戒思想

五 恵尋にはみられない興円独自の思想的發揮

六 事相事持の戒と事相戒体義の真意

第四節 叡山戒法復興期（黒谷流）における

戒壇院と授戒本尊の思想

一 興円の『戒壇院本尊印相鈔』

二 授戒本尊と一心戒蔵の考え方

三 授戒三聖の印相

四 登壇即身成仏の意味

### 第四章 重授戒灌頂の思想と一得永不失の戒体義

第一節 重授戒灌頂と本覚思想

一 中古天台における戒灌頂儀の成立と本覚思想の問題

二 円戒復興事業と戒灌頂儀の確立

三 戒灌頂儀の構成と奥義書

四 戒灌頂儀のなかの本覚思想

五 戒灌頂における「即身成仏」義

六 「一心三観」の相承と「一心戒蔵」の考え方

七 仁空の「戒灌頂」批判と靈空の「本覚思想」批判

第二節 戒家恵鎮の「直往菩薩戒」の思想

一 叡山戒法復興における恵鎮の位置

二 恵鎮の伝記と戒家における役割

三 『直往菩薩戒勘文』の撰述意図

四 南都戒と北京戒の位置づけ

五 叡山天台の直往菩薩戒法

六 戒灌頂家の戒体義とその特質

第三節 叡山黒谷戒系における戒体理論

- 一 「一得永不失」の解釈を中心として一
- 一 「一得永不失」義の典拠と円琳の注釈
- 二 了慧の『天台菩薩戒義疏見聞』にみる

「一得永不失」の解釈と浄土宗戒学の特色

- (一) 法然からの「理・事二戒」の相伝
- (二) 円琳にもとづく解釈
- (三) 「一得永不失」の考え方

- 三 惟賢の『菩薩戒義記補接鈔』にみる

戒灌頂家の戒学

- (一) 黒谷・法勝寺流の戒学の特質
- (二) 一心戒蔵の「仮色戒体」義
- (三) 「一得永不失」を擁護する解釈上の特色

- 四 仁空『菩薩戒義記聞書』にみる廬山寺流の解釈的特徴

- (一) 廬山寺流（仁空）戒学の特徴
- (二) 作法受得の「仮色戒体」義
- (三) 「戒体不失」の解釈と浄土念仏との関係

- 五 一得永不失義における理戒と事戒の問題

- 第四節 法然と親鸞における戒律観の変容と独自性

- 一 親鸞における戒律の問題
- 二 法然における持戒の問題
- 三 親鸞浄土教の独創性と普遍性

## 第二部 梵網経「十重四十八軽戒」の戒相解釈研究

### 第一章 天台『菩薩戒義疏』における五戒の解釈

- 第一節 天台『義疏』の第一殺戒釈にみる戒相釈の特色

- 一 はじめに
- 二 声聞戒に対する大乘戒の意義づけ
- 三 殺戒（戒相）の随文解釈
- 四 「殺業の四縁」による注釈
- 五 三聚浄戒にもとづく解釈的特徴

- 第二節 第二重禁から第五重禁戒の戒釈的特色

- 一 明曠の『疏』にみる「刪補」の性格
- 二 第二盜戒の解釈にみる不与取の意味
- 三 第三姪戒の解釈における姪相の諸種
- 四 第四妄語戒釈にみる大妄語
- 五 第五酤酒戒釈における大乘戒的特性

### 第二章 天台『菩薩戒義疏』にみる「菩薩戒」注解の特色

- 第一節 第六「説四衆過戒」釈における菩薩戒的性格

- 一 「説四衆過」の意味
- 二 犯戒の四縁
- 三 口業の戒としての特性

- 第二節 梵網戒「後四重禁」の解釈

- 一 「十重禁戒」の菩薩戒としての意義
- 二 第七重「自讚毀他戒」釈
- 三 第八重「慳惜加毀戒」釈
- 四 第九重「瞋心不受悔戒」釈
- 五 第十重「謗三宝戒」釈

### 第三章 天台『菩薩戒義疏』の「四十八軽戒」釈

- 第一節 天台『義疏』の軽戒に対する注釈形態

- 一 法蔵『疏』や明曠『疏』との違い

- 二 第一「不敬師友戒」積にみる十重禁戒積との同異
- 第二節 第五輕戒までの戒相積にみる特色
  - 一 「不許葷酒入山門」の諸戒に対する注釈
  - 二 第五「不教悔罪戒」積にみる犯戒と懺悔

### 第三部 中古天台と近世における持戒念仏の思想

#### 第一章 天台僧・真盛の持戒念仏観と思想的意義

##### 第一節 室町期の真盛にみる持戒念仏法と教化の特色

- 一 はじめに
- 二 真盛の伝記資料と新出の文献
- 三 真盛の発心と『往生要集』感得の意義
- 四 真盛の教化形態にみる倫理的勸誡
- 五 別時念仏修行にみる天台的特色

##### 第二節 真盛における『往生要集』観の特色

- 一 真盛に関する新出資料の意義
- 二 二祖盛全撰『雲居月双紙』の性格と内容
- 三 善導流による真盛の「本願念仏」義
- 四 真盛の『往生要集』観にみる天台的特色

#### 第二章 真迢の法華円教観にもとづく持戒念仏の思想

##### 第一節 江戸初期・真迢の日蓮宗から

天台念仏への回帰とその真意

- 一 真迢の伝記にみる転宗の理由
- 二 真迢の著作と論争の展開
- 三 『破邪顕正記』の内容構成と撰述意図

##### 第二節 江戸初期における念仏と法華の論争とその特色

- 一 真迢の「日蓮宗」批判と「四宗」擁護の立場
- 二 真迢の『破邪顕正記』にみる浄土念仏思想
- 三 日賢の『論迷復宗決』による真迢への批判
- 四 『正直集』の念仏義と日賢を批判する論点
- 五 念仏と法華の論争にみられた特色

##### 第三節 真迢の持戒念仏観と『行者用心集』

- 一 真迢の持戒念仏における戒律観
- 二 『念仏選摧評』にみる菩提心と念仏の考え方
- 三 真迢による『行者用心集』の携帯と戒行重視の特色

##### 第四節 天台の念仏聖・真迢にみる密教観の特質

- 一 真迢の法華教学と「四宗」観
- 二 法華円教観における真言密教の位置づけ
- 三 台密の法華に対する「理同事勝」の意義

#### 第三章 安楽派靈空の「即心念仏」論争と持戒念仏の意義

##### 第一節 即心念仏論争のなかの「真盛念仏」観

- 一 安楽派靈空の「即心念仏」義
- 二 論争の経過と園城寺義瑞の靈空批判
- 三 靈空と義瑞にみる「真盛念仏」観の相違点
- 四 天台念仏における理観と事観の問題

##### 第二節 華嚴・鳳潭の『念仏往生明導筈』にみる浄土念仏批判

- 一 僧濬鳳潭の略伝と『念仏往生明導筈』の述作
- 二 曇鸞の『往生論註』への「易行他力」批判
- 三 善導の『観経疏』に対する「弘願念仏」義への批判

##### 第三節 僧濬鳳潭による天台念仏批判の特色

- 一 天台の即心念仏論争に対する評破

二 『念仏往生明導筭』にみる天台『観経疏』批判

三 鳳潭の『浄土十疑論』批判と華嚴の立場

#### 第四章 江戸時代後期における天台僧・法道

##### にみる持戒念仏

一 天台念仏における法道の位置と役割

二 法道の『行状記』と著作

三 法道の伝記にみる持戒念仏の事績

二 法道の修めた別時念仏行における「本願念仏」義

#### 《翻刻資料》興円『円頓菩薩戒十重四十八行儀鈔』の翻刻と和訳

第一節 興円『円頓菩薩戒十重四十八行儀鈔』の翻刻

第二節 解説と和訳

## 論文要旨

### 第一部 中世期の天台比叡山における戒律復興と重授戒灌頂の思想

第一章では、叡山黒谷流による中世期の戒律復興運動と、その思想の形成および展開の特色を論じている。黒谷流の戒脈とは、

叡空一源空一信空一湛空一恵尋一恵顛一興円一恵鎮

と次第するという。このなか、顕著な業績を挙げたのは、恵尋とあとの興円・恵鎮である。近年の刊行になる『続天台宗全書』の『円戒1』『円戒2』『史伝2』等に、それら学僧たちの〈重授戒灌頂典籍〉と名づける著作群や伝記資料が収録されたので、これら新たな史資料をもとにして、未解明の事蹟と思想を中心に論及するとしている。

興円らは、鎌倉期の南都律（奈良）や北京律（京都）の戒律復興を意識し、大乘戒法による叡山仏教の蘇生革新を志し、円頓戒の確立と籠山修行の復活をはかり、その過程で重授戒灌頂の授戒儀則を考案し、それを樹立した。このようななか、特に戒脈が源空法然を経ているとしながらも、興円らの円頓戒法と戒灌頂には浄土念仏思想をもっておらず、固有に天台の思想によっていることが特筆出来るという。この点は、源空後の浄土宗に受け継がれる円頓戒法とは明確な違いをもっている。興円以後の叡山黒谷（天台）の戒系は、恵鎮ののち法勝寺流と元応寺流に進むなか、その戒法に念仏門が加わるのは、室町期の真盛以後である。真盛の持戒念仏法は、本研究ではこれを第三部の課題としている。

ついで問題とするのは、叡山における戒律・修行の復活実践と、天台本覚思想との関係である。興円・恵鎮らが案出した重授戒灌頂には本覚思想を中核にもつ一方で、戒律の受持と修行はこれらを厳しく実践して復興を成し遂げている。そこにおける本覚的思考は、高度な止観修行における理観によるとしている。そして、興円らの本覚思想は、末法観のもとに志向した「戒法の即身成仏」または「受戒即身成仏」という頓即または頓速の成仏法と結びついていると指摘する。この頓速（頓即）の考え方は、鎌倉新仏教の祖師たちと共通する特色であり、戒灌頂に集約される黒谷流（のち法勝寺流）の仏道は、鎌倉期以降に興った日本仏教の天台的な一形態であると捉えている。ただし、興円らでは戒法を特化するとはいえ、そこには戒法における法華と密教思想との融合形態があり、鎌倉新仏教の祖師たちに共通する「一行に仏道を集約する選 択的な考

え方」とは異なって、四宗兼学の天台的特色を保持していることも見逃してはならないという。

このような天台の形態に注意を払いながら、「正し法よ華え傍ほ依つ梵げ網ぼ」の戒律観、「一心戒蔵」の戒体義、「事相事持」という考え方による梵網戒相の実践、そして「授戒儀」の重視による「信心受戒」と「受戒即身成仏」の仏道を、興円ら黒谷流戒灌頂家の特色として明らかにしている。

第二章では、興円らの事業に先駆的な役割を担った求道房恵尋の事蹟と思想の特色に焦点をあてている。著作には、『円頓戒聞書』と『一心妙戒鈔』があり、また『三通口決』等によって伝記に関する新たな知見を得ている。

まず恵尋の事蹟では、「十二年籠山行」はこれを途中で断念し成就できなかった事実から、戒法の再興に伴う重授戒灌頂の成立は恵尋にそれを認めず、また恵尋の『聞書』には浄土念仏思想が見られるところから、浄土宗との関わりが比叡山での活動を妨げたとしている。

『一心妙戒鈔』では、円頓戒体を「一心の惣体」と位置づけ戒体義を説くことに特色を見出し、そこには後の興円によって撰取される思想を多く含み、また戒灌頂の萌芽的思考を読み取っている。戒体理論では、法華の本迹二門によって論述し、第九識戒体義、および本門位の事相戒体（真如随縁の色法）を主張しているとする。興円はのち、これを発展させて「一心戒蔵」の戒体義を立てることになるという。

つぎに、『円頓戒聞書』では、安あん然ねんの『普通広釈』の下に思想を一層発展させ、円頓戒と一得永不失という要語と考え方が説明され、また円頓戒法が正し法よ華え傍ほ依つ梵げ網ぼ、授戒即身成仏および一得永不失を内容として論述されると見ている。とくに、受戒で発得した「事相の戒体」が一得永不失の性格をもち、これが直ちに即身成仏の根拠とされるので、円頓戒という語は頓速の成仏を戒法のなかに表現する意味をもつことを知り得るといふ。そして、事相の戒体は法華理観による実相中道心によって観取されたものであり、破戒のことは「雲間に隠れた名月」の喩えで巧みに説明され、恵尋では事相の戒を持つこと（持戒）を厳しく求め、これを勧めているという。

第三章では、戒律復興を導き成就させた伝信和尚興円（戒家）の事業と思想を、伝記資料と著作をもとに解明している。興円は指導者で、恵鎮円観や光宗道光らがそれに従っている。初め比叡山西塔の別所黒谷を拠点に活動し、のち神蔵寺（東塔別所）や帝釈寺（横川別所）に及び、さらに京洛の元応寺と法勝寺ほかを戒法宣布の拠所としたという。

興円の『一向大乘寺興隆篇目集』と、恵鎮の潤色が混じる『一日一夜行事次第』（即身成仏抄）では、興円らの修行の形態と僧制・法式が詳しくみられるという。すなわち、「三時の勤行と二時の坐禅」を軸とした一日の行法と顕・密の修学、毎月と毎年の仏事、或いは梵網戒に基づく僧制など、興円らの修行の形態を知ることが出来る。なかで、末法観による円頓戒法（直道法）の緊要が主張され、戒法の受持を基にした「直道の即身成仏」が時機に適う得道法とされ、戒法と修行を「事相事儀」に勤めよと力説されることに、主要な特色があるという。

つぎに、興円の『菩薩戒義記知見別紙抄』では、天台『菩薩戒義記』巻上の「三重玄義」が注釈されるなか、戒体義が詳しく興円による円頓戒法の重要な教理が述べられていると見る。そこには、恵尋を承ける考え方と、興円独自の思想があり、なかで「爾前・迹門・本門・一心戒蔵」の四重義により、一心

戒蔵（円頓戒の事相戒体）を「能開の根源」と位置づけて、それを根拠に即身成仏義を主張するのが、興円の發揮した最も中心の教理であることを明白にしている。

また、興円の『戒壇院本尊印相鈔』には、興円らの授戒本尊（三聖）が印相をもち、そこに戒家特有の思想が付与されるとしている。そこでは、戒・密一致と事相事持の考え方により、梵網の戒相（事戒）に密教の事相（印相）が結びつき、さらに本覺的な思考を加えて戒壇院が戒体になぞらえられて「登壇即身成仏」が明かされとしている。

第四章では、興円らの確立した重授戒灌頂儀の思想的特質を、主として天台本覺思想との関係で明白にし（第一節）、次に興円と活動を共にしてのち、円頓戒の弘通に活躍した恵鎮の顕著な事蹟と、著作にみる戒法顕揚の思想を究明する（第二節）。そして、恵鎮を継いだ惟賢（戒灌頂家）の戒疏では「一得永不失」義を特色にすることから、ほぼ同時代の了慧（浄土宗）と、仁空（浄土宗西山の戒系）の戒疏との比較から、それぞれの戒学の違いを論じている（第三節）。さらに、中古天台期には叡山天台で戒觀念の変容があった側面を最澄に仮託された『末法燈明記』の引用からこれを求め、鎌倉新仏教の祖師達のなか、とくに親鸞の浄土教では無戒の仏道を確立する独創性と普遍性について論究している（第四節）。

## 第二部 梵網経「十重四十八軽戒」の戒相解釈研究

この第二部では天台大師の『菩薩戒義疏』巻下を基本テキストにして、梵網戒に対する天台的な解釈の特色を求める事を目指している。ただ、黒谷流興円の天台『義疏』に基づく戒相釈を述べた『十重四十八行儀鈔』は、巻末に、翻刻と解説・和訳を収録しているので、この疏はここでは用いていない。そこで天台『義疏』の詳細で勝れた末註である実導仁空と靈空光謙の両注釈書を主に用いてこれを論述している。

また天台の梵網戒疏には古来明曠の『疏』（唐代）があり、天台『義疏』を「刪補」する性格であることを、十重禁戒釈と軽戒釈の双方において具体的に示そうとしている。加えて天台にはライバルとなる華嚴の法蔵『疏』とも対照させて、華嚴が重厚な解釈で学解に富むのに対し、天台の解釈は簡潔を要とし実践に用いられやすい特色をも描き出そうとしている。

さて、梵網の十重四十八軽戒には、初めの十重禁戒で「殺・盜・姪・妄・酒」の五戒と、固有に菩薩戒的な性格をもつ後の五戒に分類できる。初めの「五戒」釈では、梵網戒としていかなる菩薩戒的特色を天台『義疏』はもっているかを問題とする。例えば第一殺戒なら、声聞戒との差異を、「開遮異・色心異・軽重異」の三事によって、慈悲心による菩薩戒的性格が論釈されているとする。また、「是衆生・衆生想・殺害・命根断」の四種義により、重罪（波羅夷罪）と成る行為が量られ、このような罪の軽重を量る基準の項目は戒ごとに異なるという。そして、天台『義疏』では三聚浄戒の意味によって戒相を捉え、或いは声聞戒が身業（行為の事実）によるのに対して、菩薩戒は意業を重視するという釈意等によって、梵網戒の菩薩戒的性格を際立たせているとしている。

十重禁戒の後五戒釈については、第六重の「説四衆過戒」が、『優婆塞戒経』を背景として、しかも「同法者の犯した七逆と十重の罪過を、異法者に向かって説くことを禁ずる」という『義疏』の特異ともいえるべき解釈を明らかに

している。第七重以下の四重禁は、『菩薩地持經』や『瑜伽論』菩薩地の「四重法」に相当する禁戒が見られ、梵網戒では禁止の事柄とともに、菩薩として積極的に為すべきことをも規定する勝れた性格を看取している。また、重罪と成る（成業）因縁には、「前人領解」が加えられるのは、これらの菩薩戒が口業の罪を制する所以であること、或いは第十重「謗三宝戒」には、邪見邪説戒の名も与え邪見の諸種を論ずるなどを、天台『義疏』の特色としている。

つぎに、四十八軽戒積では、はじめの第五軽戒までによって『義疏』の注釈形態にみる特色を論じている。すなわち、十重には止悪（不応）を前面とするのに対して、軽戒では修善（応）を説くのを先にするという解釈であったり、或いは「不許葷酒入山門」などと寺院の結界石に書かれる第二飲酒・第三食肉・第四五辛戒には、釈尊時代の逸話を挙げて病気などのときはいずれも許されるとする軽戒としての特色などを、天台『義疏』の注釈の中に認めている。

そして、天台『義疏』が依用した背景となっている文献として、『十誦律』『成実論』『大智度論』など、鳩摩羅什所訳の律蔵と論書であることを論じている。この『義疏』が、天台智顛の真撰であるかどうかは特に問題とはしていないが、内容的に智顛に遡れる古さをもっていることも示唆している。

### 第三部 中古天台と近世における持戒念仏の思想

真盛の持戒念仏観をみるとときには、応仁・文明の乱以降の乱世と、戦国時代の始まりという時代背景を捉えることは必須であることを述べた上で、真盛が階層を問わず広く帰依を受けたことを、天台的特色のひとつとしている。なかでも、宮中と公家の知識人達が真盛の教化に従い、また守護大名などの為政者が真盛の厳しい諫誡を受け容れたのは、真盛の「無欲清浄」という宗教人格によることを伝記資料から跡づけている。そして、真盛の念仏観は、弟子や農民達と修めた「四十八日別時念仏」に最もよく表れるとする。そこでは、真盛は「一向専称」を勧めており、その念仏観は「本願口称の念仏」であると同時に、『往生要集』にもとづく長時修を志向し、また梵網戒を応用した修行規則が用いられていると述べている。その念仏行は、出家を中心に修められ、農民はそれに結縁する形を取り、念仏三昧から見仏の理観（般舟三昧）に進む性格ももっているという。

真盛の弟子には尼僧が多く、また宮中でも女官たちが熱心に説法を聴聞するのは、戦乱の時代に弱い立場の階層に慕われた故と推測する。或いは真盛では、馬・牛・猿・鳥たちにも十念を授け、また戦火の亡霊たちに念仏廻向しているのは、真盛の「六道能化」の性格として認められ、『往生要集』にもとづく諸種の教化法から、「地蔵菩薩の化身」として信仰された理由があるとしている。

真盛ののち、真<sup>しん</sup> 迢<sup>ちよう</sup>（1596～1659）は、真盛の持戒念仏に帰した有力な学僧であった。真迢は、日蓮宗から天台に転じた特異な経歴をもち、従来は日蓮宗側からの研究ばかりであったが、転宗後の天台における事蹟とその思想を評価することに本研究の意義はあるとしている。その転宗には、当時の日蓮宗における不受不施派の形成と深く関わっており、真迢が天台に求めたのは、念仏と「戒・行」を重んずる仏道であることを、その伝記と著作によってあとづけている。

真迢は、日蓮宗の貫首を辞し、比叡山横川そして真盛中興の西教寺に入ったという修学の経歴から、その念仏観は法華円教観のもとに『往生要集』によっ

て跡づけられる特色をもつという。また、趙宋の知礼教学を重んじ、湛然・源信・証真など、天台の伝統教学と文献主義によって、日蓮の法華独一主義を拒否し、日蓮の四宗排斥を謗法と難じている。真迢には、念仏のほかに密教の事相にも極重障の鈍根を救済する機能があるとみる考え方があるが、真迢自身の仏道では、『行者用心集』をつねに携帯して、明恵高弁の戒律を尊重する立場と法然の念仏門とを融和させ、これら「戒と称」の二途が時・機の上に簡要であることを主張し、自ら念仏行者としての後半生を送ったとする。そして、真迢の戒行への志向は、江戸時代に天台を初め各宗に戒律が中興される先駆けとなった意義も指摘している。

つぎに、安樂靈空（1652～1739）は、江戸時代に四分律を取り入れた戒法（安樂律）を中興したなかにおいて、即心念仏を提唱したので、ここにも持戒念仏の一形態が見られるという。靈空の即心念仏法は、唯心の理観に称名（事の念仏）を取り入れた念仏法で、末世の愚夫凡夫にこれを勧めることに特色があった。これには、天台内で靈空と義瑞の間に論争が起こり、また真盛念仏の評価にも大きな影響を及ぼしたとする。義瑞との間では、趙宋の四明教学についての論争とからんで、天台の念仏は「理と事」が兼備するとして、靈空では即心念仏にそれをみるのに対して、義瑞は理観の即心とは別に事の念仏を立てるべきとした。義瑞では、真盛念仏は理観を混えない事の念仏（称名）であると主張したが、天台内では真盛の念仏法語に対する解釈には靈空の影響下に理観中心の理解がなされたことを論証している。

即心念仏論争には、華嚴の鳳潭僧濬（1659～1738）も加わっている。鳳潭は、華嚴の立場から天台念仏の本質は理観であるとの確信をもち、事の念仏を批判し、浄土宗のみならず、天台に対しても称名法を用いることに反対した『念仏往生明導笱』を著している。

江戸時代の後期に出た法道（1787～1839）は、真盛の持戒念仏法に帰してこれを修め、また即心念仏の影響から脱して真盛の念仏観が本願念仏の唯称法によることを明確にした特色がある。当時の真盛門流には伊勢に真阿宗淵や、荷寮妙有らの有力な学僧があり、法道はこれらとの交友のなかで仏道を修めている。ただ、法道は法然の念仏義に傾きすぎて天台的な特色を失うかの側面も指摘されるといえる。しかし、法道は別時念仏の修行を熱心に行い、その行状記と著作集に依れば、法道が『往生要集』と真迢を拠り所として、戒行を重んずる仏道、すなわち持戒念仏を修めたことに特色があると論じている。

翻刻資料《翻刻と解説》興円『円頓菩薩戒十重四十八行儀鈔』

最後に興円の『円頓菩薩戒十重四十八行儀鈔』の翻刻と解説と和訳を示してこれを付加している。和訳には丸カッコ内に典拠や熟語の現代語訳を補って研究の助縁としている。この翻刻研究と解説では、本書が中世期の十二年籠山中に著され、黒谷流の特色（事相事持や即身成仏義など）をもつことに意義を見出すとしている。

### Ⅲ、審査委員会の評価

本研究は、日本の鎌倉時代以降に、天台比叡山で黒谷を拠点に戒律復興を志してこれを成就した学僧たちの事蹟と、そこに成立した円頓戒思想の特色を説明することを第一の目的として、その後にも比叡山天台には幾度か戒学が振興

し、さらに念仏思想が結びつき持戒念仏が興るそれらの展開をあとづけようと試みた力作である。

時代的には、鎌倉と室町時代を中心とする中古天台期、並びに江戸時代の近世までをも含み、思想的には天台系統の大乗戒（円頓戒）と念仏の発展形態を研究しようとしている。天台仏教では鎌倉時代に、念仏・禅・法華等の新仏教が輩出したことは周知の通りで、本研究ではそれらとの関連にも触れながら、天台が教観二門によって観門（止観修行）に特色をもつごとく、「戒律と修行」を重んずる側面に比叡山仏教の展開をあとづけようとした研究である。

これらの研究は、今日までには恵谷隆戒・色井秀讓・窪田哲正の諸氏の研究が認められるが、いづれも文献資料的制約があって必ずしも満足された研究とはいえなかった。寺井氏はこれらの研究の上に立って、新たに発刊紹介された文献を加え、それを詳細に検討して本論文を完成させている。従ってその功績には大なるものがあると言って良いであろう。

さて、本論文は上述の如く三部構成の大著で、第一部では、比叡山の黒谷の叡空（～1179）から源空（1133～1212）を経て黒谷流戒脈の恵尋（～1289）と、その後の興円（1263～1317）・恵鎮（1281～1356）らによって成就する叡山戒法復興の事蹟と、そこに形成された円頓戒の「重授戒灌頂」儀にみる思想的特質を明白にした点に本論の發揮点がある。これは、『続天台宗全書』の刊行によって、史資料が新たに紹介され研究体制が整ったことによる新たな研究といえよう。

比叡山には最澄（767～822）によって大乗戒壇の樹立と独自の十二年籠山行という修行形態が確立されていたが、時代と俱に衰えたのを、鎌倉期以後に黒谷に集う学僧らがこれを復興した。最澄時代には円戒と呼ばれていた天台の大乗戒は、中古天台期には「円頓戒」と称され、その一大特色を「一得永不失」で語られた。それを興円らが戒法と修行の再興過程で確立した重授戒灌頂において「受戒即身成仏」という独特の考え方を生み出したと見る。ここに中古天台期に成立し発展した戒法と思想の特色が認められるという認識は注目に値するといえよう。特に「一得永不失」義は天台系統の大乗戒疏では共通に重視されるため、了慧（浄土宗鎮西、1251～1330）と、仁空（浄土宗西山、1309～88）の戒疏をも研究し、それぞれの学系における解釈上の相違によって戒学の違いも明白にしているなど緻密な研究を重ねている点をまず評価したい。さらにまた、叡山での戒観念の変容の側面にも触れ、源空法然の立場と、その下に念仏門によって無戒の仏道を確立した親鸞の戒律観にも論を進めるなど、幅の広い研究を行っている。

特に戒灌頂の奥義書である興円の『十六帖口決』を討究している点を取り上げてみたい。戒灌頂は、十二年籠山行を終えた者に即身成仏義を知らしめる法儀であり、口伝による秘密法門である。そこでは六即合掌印が授けられ、その威儀は「本覚無作の成仏」（本覚仏）として説明され、壇上で「中道王三昧」という実相観（止観）が修せられて、「一心三観の口決相承」が行われるという。ただ、修行はそれで終わるのではなく、修行に必要な道具類も授けられ、利他の修行をなすべく持戒が勧められているという。すなわち、戒灌頂儀の即身成仏義は、本覚的な思考によるものの、中道実相観により持戒の上に菩薩行を続けるという意義に、その本質をみると結論づけている。この究明こそが戒灌頂の一つの頂点であろう。

ついで、恵鎮の研究では叡山に復興した大乗戒（直往法）が南都（廻小入大

戒)と北<sup>ほくきよ</sup>京(開権顕実戒)に中興された戒法よりも、いかに勝れているかを顕揚したとして、天台の法華教学をもとにした、本覺的思考の戒法即身成仏義と、事相事持の梵網戒受持を論述するなど、戒灌頂儀に表現されるのと同じような思想的特色も見られるとするのは興味深い。

しかも続く惟賢の考察においては、授戒儀を重視して戒法の即身成仏を論じ、「証上の修行」のために持戒の必要性を説くと見たのも同様である。

あるいは鎌倉仏教の祖師方が引用した『末法灯明記』に関する論究も関心を引く。法然は、念仏を<sup>せんじやく</sup>選<sup>せん</sup>択的に採用しながらも天台の円頓戒を尊重する宗風を維持したとみるのに対して、親鸞は『末法灯明記』の全分を受け容れ、法然の選択思想に導かれて自力を全く否定する独自の仏道を開拓し、「三願転入」の思考によって無戒の在家仏教を確立したと論じて鎌倉新仏教の研究へとこれを繋げているのも本論の一つの展開であろう。

総じて本研究は、本覺思想は理戒のみを重んじて事戒(持戒)を軽視するという見方に反省を加え、叡山黒谷流の戒灌頂(円頓戒法)は本覺思想に立ちながらも持戒を強く勧めることを明らかにし、また黒谷流の事戒の概念では梵網の戒相のみならず、戒体にも事相の考え方を導入して末法時代の即身成仏義を導き出していることを明確にしたといえよう。この場合の本覺思想とは、凡夫の中に本覺仏を認める考え方を指しているが、それは止観修行の理観によって観取される本覺仏であり、現実肯定に立ちながらも破戒と無戒を是認するのではなく、むしろ本覺仏の故に持戒を強く求めて菩薩行(如来行)を勧める考え方であると見極めたのがその中心といえよう。そして他方で、末法観に立って事戒を困難としてこれを放棄するのは、日本仏教では決して墮落ではなく、普遍性をもった仏道として受け容れられたことを親鸞によって論じたことは寺井氏の発揮点と言えるであろう。

第二部では、『梵網經』の「十重四十八輕戒」の戒相を理解するための解釈研究を行っている。叡山での戒律復興と戒学の振興は、修行のために梵網戒の事相を重視するので、梵網の戒相を天台ではどのように理解し学ぶかに焦点を当てている。天台系統の戒学では、天台<sup>ちぎ</sup>智顛撰とされる『菩薩戒義疏』(または同『義記』)が尊重されたことは言うまでもないが、その難解さの余り、詳細で勝れた戒疏として定評のある<sup>じつどうにんくう</sup>実導仁空(廬山寺流)の『義記聞書』と、江戸時代・安樂律の<sup>れいくうこうげん</sup>靈空光謙(1652~1739)の『会疏集註』を用いて、論文解説を行って解釈上の特色を摘出しているのも筆者の究明する姿勢の現れと評価出来よう。戒相解釈の研究は従来あまり進められておらず、今日の仏教学では斬新な試みといえる研究分野である。

第三部では、叡山黒谷の戒系に属して、室町時代に『往生要集』をもとに持戒念仏を興した<sup>しんせい</sup>真盛(1443~95)と、その後続く持戒と念仏の思想問題を究明している。

今日まで佐藤哲英博士によって天台の念仏は真盛より以降「戒淨双修の時代」に入ったとも言われている。それを、円頓戒を基盤にした持戒念仏法の観点から、顕著な事蹟をもった学僧たちによってこれを明らかにしようとしたのが本論である。

まず真盛の伝記や持戒念仏法は今日まで必ずしも明確で無かった。その真盛の特色を、寺井氏は新出の盛全撰『雲居月双紙』を駆使して真盛像に迫った研

究をなしている。まず真盛が黒谷に隠棲し<sup>ほっしん</sup>発心した意味を問い、真盛の念仏観と教化法の特徴と、真盛が「地蔵菩薩の化身」であるとの信仰を生む意味など新しい視点を加えて説明したのは氏が初めてであろう。

真盛以来、天台では戒と念仏が重要な潮流を形づくり、江戸時代に入って初期には<sup>しんちよう</sup>真 迢（1596～1659）が、また後期には<sup>ほうどう</sup>法道（1787～1839）が真盛を追う持戒念仏の展開を行っている。或いは、江戸中期に安楽律の靈空が即心念仏を興したのは、持戒念仏における別の潮流であると見ることも出来る。

このように天台には、止観念仏（最澄）、不断念仏（円仁）・事観念仏（源信）・観心念仏・本願念仏（真盛）・即心念仏（靈空）という歴史的な発展がみられるが、これらの念仏義の特徴を、理観と事観（称名を含む）によって分類する方法を用い、戒律と念仏について「理と事」をめぐって日本天台の思想が相克発展するなか、末法観ともあいまって理から事（事戒と事観）へと進む歴史的展開をあとづけたのは大変におもしろい。そして、そのような趨勢にあっても理観は放棄されることなく尊重され、しかも真盛・真迢・法道ら本願唯称の「事の念仏」をこととする場合にも「戒・行」を重んずる天台的特色をもつことを明確にした点は大いに賞賛して良いであろう。

ただ、本論文は、寺井氏がすでに発表した論文を集成したもので、そのため章があらたまるごとに同内容を重説したり、あるいは各部ごとの結論を述べているものの全3部をまとめた最終的な結論が記載されていないなど、全体を通して一つの論文として把握するにはいささか違和感があったのは残念である。しかしながら、その内容は既述の如く新しい視点からの研究成果が幾点も認められ、十分に学界に寄与出来うると評価されて良いと思われる。よって龍谷大学学位規程第3条第4項の定めるところにより、本審査委員会は寺井良宣氏を博士（文学）の資格を有するものであることを認めるものである。

平成 25 年 10 月 15 日

主査 浅田 正博  
副査 楠 淳證  
副査 林 智康